

オルタナ日本 上

地球滅亡の危機

大石英司

Eiji Oishi

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▢（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▢キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

絵・挿画 安田 忠幸

目次

プロローグ	9
第一章 国家緊急避難計画	24
第二章 マンデラ病	41
第三章 本当の世界	65
第四章 盗まれた中国	92
第五章 二人の天才	118
第六章 連合艦隊空母機動部隊	145
第七章 東シナ海航空戦	169
第八章 時空の旅人	192
エピローグ	204

登場人物紹介

日本

〈陸軍〉

ど もんこうへい

土門康平 陸軍中将。特殊作戦群群長。コードネーム：タンバリン。

はら だたくみ

原田拓海 陸軍少佐。軍医。東京ERで研修中だったが、インターン生活を終えて第四〇三本部管理中隊A小隊小隊長に復帰した。

はたけともゆき

畑友之 コードネーム：ファーム。

たかやまけん

高山健 コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ

大城雅彦 コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお

待田晴郎 コードネーム：ガル。

たぐちしんた

田口芯太 コードネーム：リザード。

ひ がひろみ

比嘉博実 コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き

吾妻大樹 コードネーム：アイガー。

かんあや か

姜彩夏 陸軍少佐。土門の副官。

うるしばらたけとみ

漆原武富 コードネーム：バレル。

ふくとめだん

福留弾 コードネーム：チェスト。

い い かける

井伊翔 コードネーム：リベット。

みず の とも お

水野智雄 コードネーム：フィッシュ。

み どうぞう ま

御堂走馬 コードネーム：シューズ。

あねこう じ きねあつ

姉小路実篤 コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさふみ

川西雅文 コードネーム：キック。

ゆ ら しん じ

由良慎司 コードネーム：ベビーフェイス。

あ び る あきら

阿比留憲 コードネーム：ダック。

あかばねたく ま

赤羽拓真 コードネーム：シェフ。

〔陸軍東京衛生学校〕

し ば ひかる

司馬光 陸軍心理戦研究班班長。

〈空軍〉

さ はら こうじ
佐原幸司 空軍長官。

〈西方航空方面団〉

あお ば すぐる
碧葉傑 空軍中將。防空作戦の指揮をとる。

く り す さえ こ
久利須冴子 空軍少将。参謀長。

か み は や と
神隼斗 空軍中佐。飛行第五〇戦隊・隊長。コールサイン：ホーク。

〈海軍〉

ご う は へ と る
郷原智 海軍中將。連合艦隊司令長官。

ふ ち た ゆ う た ろ う
淵田祐太郎 海軍大佐。艦隊航空参謀。

あ い だ ま り こ
相田真理子 海軍大佐。艦隊作戦参謀。

《内閣官房》

ひ い ら ぎ り よ う
柊木亮 官房副長官。

《警視庁》

お つ じ も り お
小辻守雄 警視正。警視庁特殊公安係参与。初老の男で近寄りやすい
殺気が溢れている。

〔東京大学カブリ数物連携宇宙研究機構〕

ら もん ま き むね
羅門正宗 准教授。専門は宇宙物理学全般。

アリス・ファーガソン 博士。羅門の助手。ロスに両親がいる。父親
は数学者。

ひ か げ む ね さ だ
日影宗貞 理論物理学博士。“進化限界説”を提唱した人物。

中国

《人民解放軍》

〈空軍〉

ホ アン ホン タ ャ
黄宏大 空軍少将。

〈海軍〉

ツ ァ イ ト ン
蔡通 海軍中將。東海艦隊司令官。

ハ ン チ ェ ン
韓芹 海軍少将。

〈陸軍〉

チ ェ イ エ ン シ ン
銭星 陸軍少将。空挺部隊の指揮をとる。

チ ェ イ ウ イー チ ェ イ
邱一智 陸軍大佐。参謀長。

^{レイホン}
雷弘 人民解放軍・陸軍中佐。日本での肩書きは小さな貿易会社の専務。

^{リュリイシン}
盧立新 陸軍少佐。雷弘の部下。日本での肩書きは係長。

^{コンヨン コ}
孔永革 ^S精華大学教授で理論物理学者。^Lスタンフォード大学^A国立加速^C器研究所で日影宗貞と一緒に研究していた。

オルタナ日本 上 地球滅亡の危機

一九八九年、中曾根^{なかそね}政権は、悲願の自主憲法制定を成し遂げた。
そのことによつて、日本は、もう一つの歴史を歩みはじめる――。

プロローグ

硫黄島から東へ二三〇〇キロ、日本本土から一八〇〇キロも離れた南鳥島みなみとりしまが見えてくると、C-12輸送機の貨物室では、空挺降下の慌ただしい準備がはじまる。

作戦を実行するのは陸軍の特殊部隊だが、全体の指揮を任されているのは一人の軍医だった。

戦闘服に衛生徽章えいせいきしょうと陸軍医官徽章りくぐんい官いしょうをつけた原田拓海はらたくみ陸軍少佐は、その様子を見守りながら作戦の指揮をとるガルこと待田晴郎兵曹長に「どんな手順なの？」とインカムで尋ねた。

「まず高度をとったまま、四名が高高度降下H^HA^AL^L低空開傘で管理棟の裏側に降下します。衛星によるリ

アルタイム画像では、犯人は内陸側の窓にへばりつきながら撃っているということなので。本機はただちに着陸し、われわれも派手に展開し相手の注意をひく。その隙に四名が仕掛けます。しかしここは絶海の孤島ぜっかいことうで、海軍さんがほんの一〇名、保守要員を置いていただけなのに、なんで感染を起こしたんです？」

「聞いたところでは、先月の定期便で鳥類学者を一人送り込んだらしい。その先生が感染していたんだろう」

「そういえばどうです、ドクター稼業は？」

「ドクターといっても研修中の身の上だから、ま

だ何とも。でも、面白いよ。東京救急救命室^Eは毎日のように開放骨折を拝める。そういうえば、三日前に凄いいことがあったな。看護師の悲鳴がフロア中に響きわたって、何事かと診察室を飛び出したら、ライダースーツの女性が放心したように立っていたんだ。血まみれのスカーフで包まれたヘルメットを抱えていて、彼を元に戻してくださいと――

「ああ、そこから先は聞きたくもない。バイクの事故じゃよくある話ですよね。メットごと首が飛ぶってのは」

パラシュートを背負った隊員が「軍医殿」と呼びかけてきた。

「射殺許可は、出ているんでしょうか」

「いや、田口^{たぐち}さん、ただの感染者だ。射殺はなるべく避けよということだから、よろしく頼むよ」

「努力はします。先生も一緒にどうですか？」

けが人が出るかもしれない。せつかくのパラシュート徽章が勿体無いです」

「そうしたいのはやまやまだけどさ、最後にH A L O 降下したのがいつだったか思い出せない。海のと真ん中に落ちるのが関の山だ」

原田は去年まで、この部隊の小隊長を務めていた。

「この状況下で、必要な任務ですかね」

待田がそうほやく。

「……ここだけの話、政府機能の避難準備が進められているらしい。まずは硫黄島が候補にあがるだろうが、硫黄島が駄目なら南鳥島ということもありうる。だから、軍としては騒動の芽は早めに摘^つんでおきたいということだろう。ところでみんなは、免疫^{めんえき}があるんだよね？」

「らしいですね。部隊の誰一人、風邪の症状すら記憶にないけど……」

「僕は感染症の専門家じゃないけれど、そういう人は大勢いるらしい。感染した自覚は全く無いが、僕にも抗体こうたいはあった。だから、防護服の必要はないんだが」

ここで気圧同調のアラームが鳴り、全員酸素マスクの着用を求められる。原田は、待田の隣のシートに座り、ベルトを締めてから酸素マスクを着した。

機体が巡航高度からさらに高度を上げていく。

原田は、一瞬、自分が機体から飛び出すシーンを夢想した。そのスリルも悪くはないが、メスを握るスリルには変えられない。

制圧作戦は一分の隙も破綻はたんも無く進行し、輸送機が着陸して本隊が地上に散開した時には、銃を乱射していた人物は非殺傷兵器により制圧されていた。

その海軍の一等水兵は、原田が着いた時には管

理棟の廊下で後ろ手に結束バンドで縛られ、口には猿ぐつわがはめられた姿になっていた。だがその状態であつても一等水兵は、眉間に血管を浮き上がらせて、何事かを訴えようとしている。

原田はプロポフォルを注射して、ひとまず彼を眠らせた。所沢ところざわの軍病院に入れるまで、麻酔ますい管理をしなくてはならない。麻酔医の同行を求めたが人手不足で軍が応じなかった。日本中の部隊で、このような感染者が続出しているからだ。

今回のように、銃を手に立て籠こももるまで重篤じゅうとく化するの希まれだが、すでに乱射による死者は出ている。

建物のあちこちに銃撃の痕跡が残っているが、この基地はまだ幸運な方だろう。

犯人であり患者でもある一等水兵を陰圧式のバイオトランスポートバッグに収納すべく準備していると、ボートで沖合に避難していた海軍の兵士

らがようやく戻ってきた。

硫黄島基地の分屯地司令だという隊長の馬込仁志少佐は、陸軍の特殊部隊がいたことに少し驚いた様子だった。

「てっきり、海軍陸戦隊がくると思っていたのに」

定年間際という感じの少佐は、すっかり弱り切った顔でそう言う。

「救急患者搬送は、われわれの方が手慣れているからでしょう。一応、ここにいる兵士全員の検査をさせてもらいます。それで、他に感染者がいたら、どこかの部屋で一〇日ほど隔離してください」

「こんな辺境の地で隔離、ですか？」

「それほど神経質になる必要はありません。九割は軽い風邪で済む。彼のように重症化するのはいパーセント以下です。万一のため、今度は武器

ロッカーの鍵を二重にすることをおすすめします
が」

「こんな仰々しいタンクで搬送するのか」

「いわゆる強毒化が起こっている可能性があるの
で」

「たかが風邪で、精神症状など出たりしないでしょう」

「インフルエンザ脳症になると、二階の窓から飛び降りたりする。全くないわけじゃありません。ところで鳥類学者さんはどうなさったのですか？」

「行方不明です。島の鳥類を観察するために仕掛けたカメラの動画を数時間ばかりでチェックしたところ、海に入って行く姿が映っていました。こは潮の流れが速い。絶対に海辺には近づくなと警告していたので、あれは入水自殺だとは思えない。おそらく、感染症のせいでしょう。予兆

も何も無かったですし。昼飯の時間になってもここに戻らず、日没前にドローンを飛ばして探したが行方はわかっていない。そうこうしているうちに、こいつが銃のロッカーを勝手に開けて立て籠もり、われわれは港に避難して一晩過ごす羽目になった。もしかして感染すると、自殺願望を起すんですか？」

「それは初耳ですね。この病気は、まだわかっていないことがたくさんあるから、警戒は必要ですが」

無線に呼び出されていた待田が「先生、シンク警報です！ 海軍さんを連れて、ただちに島を脱出しろ」と叫んだ。

原田と馬込が「ここなのか！」と同時に聞き返す。

「このエリアを含んでいるということでしょう。予報ではカテゴリー4だそうです。急がないと」

「ここは、緊急避難プログラム^Eはありますか？」

原田が聞く。

「もちろん。発電機を落とす必要があるが、それはもう昨夜やっているから、後は個人の私物と通信機の暗号コアを外す程度だ。一〇分で脱出できる」

「急いでください。一応、全員の抗体反応を見ます。予備のタンクがあるので、感染者はそれに入ってもらいます」

「足りなかったらどうする？」

「機内のトイレをタンク代わりにするしかないですね。あそこのエアは直接機外に排出されるから」

試薬の抗体反応が出るまで待ったため、脱出まで二〇分かかった。ここで三名の感染が発覚し、急いで組み立てたバイオトランスポートに収納する。

コマンド全員も機外で簡単な除染措置を受けてから、C-12輸送機は日本最東端の島で離陸準備に入った。パイロット・クルーは全員非感染者だ。できればクルーへの感染は避けたい。

機長がエンジンを始動しながら、急かしてくる。東京から無線でしつこく離陸命令が届いているらしい。

バイオトランスポートバッグ四台を貨物室に固定するのに、時間がかかっていた。負傷兵後送訓練はしつこくやっていたが、感染症患者のそれは一度も経験が無い。これからの訓練メニューに取り入れる必要があるだろう。

原田は、それぞれのバッグに担当者^{いるま}を二名配置して、酸素供給を管理させた。入間に降りるまで意識がある三名は退屈と戦ってもらうしかない。

二基のIH1製エンジンが金切り声を上げ、C-12輸送機が離陸した。急角度で、ぐんぐんと高

度を上げる。

「ガル、無線はシンクの発生時刻を言っていたの？」

原田は、落ち着いてから待田に尋ねた。

「いえ、そこまでは。想定範囲距離も例によって広く、硫黄島周辺のどこかという程度らしいです」

「硫黄島にいる兵士は、海空で二〇〇名を超えるんじゃない？ それ、全員退避させられるの」

「今日は定期便がいたはずだから、間に合えば何人かは収容できたんじゃないですかね。さすがにC-12一機で全員は無理だと思いますが」

一〇分後、C-12輸送機は高度一万メートルの巡航高度にのり、ウェイポイントに設定した硫黄島へと針路をとっていた。

硫黄島までは約一三〇〇キロ。途中で島は無い。真っ直ぐ東京に向かった方が早い、何かあつ

た時の緊急着陸先としていったん硫黄島へと向かうのだ。

着陸はしない。燃料はぎりぎりなので、硫黄島航過後、空中給油機が迎えにきてくれる手筈になっていた。

麻酔で眠り続ける患者のバイタルを確認した後、原田はコクピットに向き任務報告を東京に上げようと操縦席背後の通信コンソールにつく。

何にせよ、負傷者が出なかったのは幸いだった。政府も軍も、今はそれどころではない。それでも、こういう事件で部隊を派遣する余裕はまだあるのだ。いつまで可能かは、わからないが。

機長が自動操縦に入れて操縦桿から手を放した気配が原田にも伝わってきた。ここから一時間は、海しか見えない退屈なフライト——のはずだった。突然、ドン！ という衝撃波が伝わった。原田は、機体後部だろうと推測する。

すぐに機長が「……なんだ、今のは」と漏らしながら計器を確認した。だが、アラームの類は無い。副操縦士の若い女性パイロットも「補助動力装置^{A P}？」と呟きながら、エンジン周りをチェックしているようだ。コンソールから首を出した原田は、「問題でも？」と彼らへ問うた。

「いや……APUかと思ったが問題はなかった。エンジンが立ち上がったから、そもそもAPUは切ったところだし。ただのエアポケットかもしれない」

しばらくすると、副操縦士が奇妙なことに気づく。

「……機長、変です。対気速度が、上がっています」

自動操縦がエンジン出力を絞る。速度が上がりすぎているのを抑えようとしているのだ。

「確かに、妙だ。よほどの追い風でも、こんな速

度は出ない」

さらに状況は悪化した。突然失速警報が出て「プル・アップ！ プル・アップ！」という合成音声の警告が鳴り響く。

操縦困難と判断したオート・パイロットが自動で解除された途端、機首が一気に下がる。機長が慌てて機首を引き起こすが、機体はほとんど反応しない。

「機長、パワーを入れて——！」

咄嗟に原田は、背後から機長へと怒鳴るように言った。

「なぜだ？ 速度超過しているんだが」

「それは偽物だ！ 近くにシンクができて、大気を吸っていると思われます。それで気圧が下がり、オーバー・スピードになったけど、エンジン・パワーを絞ったことで実際は速度は落ちている。気圧高度計を読んでくれ」

「……高度六万フィートと出ているぞ」

あり得ない高度だ。スティック・シェーカーが起こり、操縦桿がガタガタと振動しはじめた。すでに墜落寸前だ。

機長は慌ててパワーを入れながら姿勢を制御しようと四苦八苦した。いつの間にか、コクピットの外が真っ白になっている。大気が猛烈な勢いで吸われているのだ。

「コーパイさん、後ろを見るためのカメラがあったよね」と、さらに原田が聞いた。

「はい。地上ハンドリング用なので、やや下向きですけど」

副操縦士が後方監視カメラの映像を入れた。パワーレバーの前——コクピットの中央にある大型の液晶にその景色が映し出された。

空中に、黒い穴がぼつかりと空いている。その穴に向かい、大気が渦を巻いて吸い込まれていく

のが見えた。ぼつぼつと、稲光いなびかりのようなものが光っている。

「対比するものがないから、大きさはわからないが……」

「まずいですね。シンクに吸い込まれる」

機体全体も揺れはじめた。

「水平線が見えない。速度は急に落ちたが、信じていいのか？」

電波高度計があつたが、海面からも膨大な水蒸気じょうきが上がってくるため、これもエラーになつた。上昇しているのか下降しているのかもわからない。対角センサーもダウンして、機首の上下も判断がつかなくなっている。

コクピットの周囲でも、稲光が光りはじめた。

竜巻の中で雷鳴が起るのと同じ現象だ。

「これでは、何もできない……」

「コピーさん、もしGPSを受信できていたら、

高度計をGPSモードに切り替えるんだ。それで高度だけはわかる」

原田は、多忙な機長ではなく、副操縦士の方に声をかける。

「やってみます。……ええと、途切れ途切れだけでも受信はできていますね。でも安定しないため、操縦システムへの反映は無理です！」

「では、読み上げるだけがいい。それと君、離陸する前にペットボトルのお茶を飲んでいたよね？」

「なるほど！ 後ろの航空バッグにあります」

すぐに原田はシートベルトを外して航空バッグに手を伸ばし、中からペットボトルを出した。まだ半分ほど中身が残っている。

「機長、いま加速度に見舞われていないという前提だが……」

そう言うとき原田は、ペットボトルをコンソール

の上に立てた。そして、ボトルの中の水面を読む。「ほぼ水平——いや、一五度ほど機首が上がっている」

「左右は？」

「左に、やや傾いている。ほんの心持ちという程度だ。迂闊に旋回しない方がいい。シンクに吸い込まれる」

「わかつている」

ここで、待田が駆けつけてきた。

「お手伝いしましょう。GPS波をキャッチできるなら、速度もだいたい出せるはずだ」

待田が原田に代わってシートにつく。

「どうやって計算するの？」

「GPS座標の変化の度合いを読めば、だいたいの速度はわかります」

原田は、コクピットのモニターに視線を向けた。シンクは大きくなっているわけではない。しかし、

海面から大量の海水を吸い上げている。それで海面に渦ができているのだ。

竜巻のような水流が何本も発生して、その渦に吸い込まれていた。

「速度は……まずいな。時速にすると二〇キロから四〇キロも出ていませんよ」

待田は、通信データ用のモニターにGPS座標を呼び出して言う。

「機長、時速四〇キロ出ていないそうだ！」

「それならとくに墜落している。こっちのピトー管データでは、四〇〇ノットは出ている。高度は？」

「高度は、まだ大丈夫です。一二〇〇〇メートルはあります。地球が歪んでいなければ、この高度は正しいはずですよ」

それをまた機長に伝えるが、ここで待田が「こりやまずい」と呻く。

「止まってる……」

「止まっている？　どういう意味だ」

「言葉通りです。この機体は今まさに、空中に静止しているということです。推力と揚力、^{よりよい}そしてシンクが吸い込むエネルギーが釣り合い、高度一二〇〇メートルで静止している。ああ、でも今後退をはじめた。シンクに飲み込まれてます」

「機長、もっとパワーがいるぞ！　シンクに吸い込まれている」

「これがマックス・パワーだ！　アフターバーナーでもあったら焚^たいてやるが」

「ガル、アイディアはないか？」

「パワーで負けているんじゃないかどうにもできない。

誰かが引つ張ってくれない限りね」

^{ひらめ}待田は首を振ったが、そこで原田はあることを閃く。

「引つ張るのは無理だが、それに近いことはでき

る！　機長、機首を下に向けて海面に突っ込むんだ。この機体の重量は今七〇トンある。七〇トンの質量をエネルギーに転換し海面へ落ちれば、それでシンクから逃れられるかもしれない」

「海面に突っ込んだ後は？」

「何もしなくなつて、このままだとシンクに吸い込まれるんだ。迷っている時間はない」

機長が操縦桿を怖々と前方へ倒した。

「角度がわからん。しっかりそのボトルを見といてくれよ」

「了解、どーんといってください！　まだバンク角はほんの一〇度だ」

原田は、シートに座る待田の横で床に膝立ちとなり、コンソールに立てたボトルの水平線を読む。カーゴ・ルームから狙撃兵のリザードこと田口^{しんた}忠太一等兵が現れて「こっちの方が確実ですよ」と、狙撃銃用の水準器を置いた。

「メモリ付きなら確実だな。でもリザードはどうして電子水準器を使わないんだ？」

「電力がいる。われわれは、仕組みがわからないものは使いません」

原田はその水準器のメモリゲージを読み上げた。すでに二〇度のバンク角をもっている。

「ガル、変化は？」と聞きながらモニターを見ると、GPSの座標は全く動いていなかった。つまり、やや持ち直してまた静止状態に戻ったということだ。

「そのまま、もっと機首を下げて！」

「駄目だ、もう舵が効かん！ これ以上の機首下げは無理だ」

機長が悲鳴を上げるが、原田は機内スピーカーのマイクをとり「全員、持てる荷物を持ち、機体前方へ移動しろ！」と命じた。

水滴がコクピット・ガラスを叩く。それは雨で

はなく海水だ。いずれ、エンジンをフレイム・アウトさせることだろう。その前に脱出しなければならぬ。

コマンドやロードマスター、整備兵、そして南鳥島基地の兵士たちが、装備を持って前方へと向かってくる。これで三トン近くのトリムは稼げるはずだ。

「よし、いけるぞ！ 移動しはじめた。速度はまだ原付バイク程度だが」

「機長、もっと倒していい。高度はまだ……」

「一〇〇〇〇メートルです！」

バンク角はすでに三〇度を超えていた。機体が激しく振動する。今にも空中分解しそうだ。

「さらに増速してきた。機首、ちよつと上げて！」

原田は「全員、今度は後方へ走れ！ 後ろだ、後ろ！」とキャビンへ再び怒鳴った。三〇度に傾いた床を這うように、コマンドたちが後尾へ登っ

ていく。

「速度と同時に高度も下がりはじめた。早く引き起こして！」

待田も叫ぶが、そう簡単に切り換えはできないことは原田にもわかった。後部モニターを覗くと、心なしかシンクが少し小さくなったような気がする。機体の速度が出るということは、このバンク角では急激に高度を落として海面に突っ込むということだ。

「高度が急激に落ちはじめたぞ」

機長が「そんなこと言われても」と呟くが、速度が増してきたのは加速度として感じられた。まずいのは、落ちているのも体感できたことだろう。

機体はほとんど失速状態だ。相変わらず、あらん限りの警報が鳴っている。ステイック・シェーカーのガタガタという不快な振動音は、コクピットの後ろまで聞こえてくる。パイロットに警告す

るために、操縦桿を揺らすのだ。

「引き起こすぞ……」

日差しがコクピットに差し込む。周囲を覆っていた霧が晴れようとしていた。風が収まれば、この機体は空中に放り出されて海面に真つ逆さまだリカバリする余裕があることを祈るしかない。

突然、機体がまたすたと落ちた。上がりかけた機首がまた戻ったのだ。

「このまま、このまま、耐えるぞ！ 速度が出るまで我慢する——」

ここでうっかり機首が上がると揚力が完全に主翼から剝がれ、失速して鉄の塊かたまりとなって海面に落ちることになる。

機長は耐えに耐え、高度が三〇〇〇メートルまで落ちてから、ようやく機体の引き起こしにかかった。その頃には、波立つ海面が原田にもはっきりと見える。

機首がゆっくりと上がっていった。しかし失速警報は消えない。

「パワーだ、パワー！」と叫びながら、機長が身を乗り出して海面を覗こうとした。エンジンは全開だったが、速度が小さいため機体は落ち続けているのだ。

しかし最後には国産エンジンを搭載した輸送機が勝った。徐々に高度を回復し、速度も増していく。

最後の警報が消えてしばらくすると、機長はマイクを手に呼びかけた。

「ご搭乗のお客様に機長よりご案内します。当機は危機を脱出し、すでに巡航飛行に復帰しました。もう、安全です——」

貨物室から、やんやの喝采かつさいが沸き起こる。

日の光を浴びつつ、巡航高度へと機体はぐんぐんと上昇していた。機長は操縦を副操縦士に委ね

ると、シートベルトを外して背後を振り返った。

「軍医殿、機体を落とすなんて無茶なことをしなければ、われわれはシンクに引きずりこまれてバラバラになっていた。礼を言う。ひよっとして、ウイングマークをもっているのかな。あんなアイディア——」

「咄嗟に閃いただけです。機体を救ったのは、機長の技量の賜たまものです」

原田は、機長と副操縦士と握手を交わした。ここでようやく機長は細野康稔少佐、副操縦士は西村朱美大尉と名乗った。この危機が収まったらコマンドたちも含め一緒に飲む約束もした。

C-12輸送機は念のために硫黄島基地に着陸してエンジンと機体周りの損傷確認を行い、そこで燃料補給をして再度入間を目指して離陸した。

地球は「シンク」と呼ばれる奇妙な現象に見舞われていた。

それは当初、南米で発生したものだ。現象が一番最初に確認された時は、単なる地割れか地盤陥没だと思われた。しかしそれは徐々に場所を広げて水中、空中でも発生。巨大化し、近くにいるものの全てを飲み込むようになった。家、船、飛行機、何でも飲み込むのだ。

そしてあつという間に、世界中へ広がった。南アフリカ、ヨハネスブルクで発生したのは、街一つ飲み込む大津波を引き起こし、一〇万人以上の住民が犠牲となった。シンクそのものではないが、この奇妙な現象での最大の犠牲者数である。

その他にも、大西洋上で米艦隊の空母機動部隊が海面に出現したシンクの巨大ホールに吸い込まれ、六〇〇〇名もの乗組員を乗せた空母一隻が消えた。

それは最初、地質的なシンクホールに勘違いされたことから「シンク」と呼ばれたが、何かの意思があるようにも思えると思える人からは「考える」という意味での「シンク」ととらえられていた。頭文字がSかTかの違いだが。

世界はパニックを起こしつつあり、そういう時には必ず現れる疫病やカルト教団も跋扈する。すでに、戒厳令をしく国も出てきていた。

第一章 国家緊急避難計画

陸軍特殊作戦群を指揮する土門康平陸軍中將は、^{どもんこうへい}習志野駐屯地の自室でまどろみの中にいた。上着を脱いで、ソファ・ベッドで毛布を被って寝ている。

就寝前まで、昼間起こった輸送機のシンク遭遇事故の報告書に目を通していた。軍医殿はそのまま東京ERの職場へ戻ったので、待田を呼んで直接報告を聞いた。

この騒乱下、最精鋭の部隊を失わずに済んだことは幸いだったが、結果、寝付きは最悪だった。

シンクはどこで発生するかわからないため、予備役にも召集をかけている。日本でも何ヶ所かで

シンクが発生していたが、山の中や空中に出現し集落が丸ごと飲み込まれるとか、シンクが引き起こした津波で沿岸一帯が^{さら}浚われるという大きな被害はまだ出ていない。

出現予測は、まだできていなかった。万一に備え、全国の原因には制御棒が入っていたが、シンクが原子炉格納容器にかかって発生したらそれでおしまいだ。最悪の場合は臨界爆発、それが起こらなくとも炉心^{ろしん}が露出することでの深刻な被曝は避けられない。

スリーマイル、チェルノブイリに続く原発災害は何としても避けたいというのが政府と電力業界

の一致した見解だった。

一方、その措置で深刻な電力不足が発生したため、首都圏では計画停電がはじまっている。

諸々の結果、土門のここ最近の寝付きも最悪となっており、副官がドアをノックした時も目覚められなかった。部屋の電気を点けられてようやく覚醒する。

「……次はどこだ」と言いながら、土門は上半身を起こす。

「一応、アラートは出ていますが、日本ではありません。オーストラリアと西シベリア。ほとんど人が住んでいないエリアだそうです。ニープが発動されました。われわれは国家行動計画イー6号の指令下で動きます」

副官かんあやかの姜彩夏少佐は戦闘服姿で、すでに左肩はいのうに背囊を背負い、右肩にはHk-416アサルトを担いでいた。

「ニープって、何だっけ？」

「テレビのニュースくらい見てください。国家緊急避難計画のことです。国土が焦土しょうどと化した後も政府の行政機構を温存させるための避難計画のことですよ」

「どこへだ？ 館山たてやま辺りでいいんじゃないの」

「いいえ。特殊作戦の群長は、第二グループとして政府要人とともに政府専用機の二番機に乗ることになっています。一番機は、皇族方こうぞくと総理です」

「潜水艦避難組はいないのか」

「イ号潜水艦に乗り込むグループもいるはずですが、シンクは水中でも起こる。空と違い、すぐ逃げるといふわけにもいかなかったため、潜水艦組は少し気の毒ですね」

「国土が消え失せて国民の九割が死んだ後に、行政遂行能力とかいったって何になるんだ？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。